

最優秀賞

遠き虹への反逆

福岡県立筑紫丘高等学校 二年

野口 創

大学二回生の、夏の話。

薄汚れた車窓からでも、虹は見えるんだと知った。がらくたのようなビル群を抜ける急行電車の中で、私は扉のそばに佇む。

ビルで時折隠れるけれど、虹が遠く見える。やっぱり、虹は何色かなんて議論はやめにして、虹色と結論付けるべきだと思う。

「虹は確か、夏の季語だったな。まあ、一年中見ることはあるだろうが」隣で高遠くんが呟いた。単に、今現在のように夏の夕立後が最も虹の訪れやすい時間であるだけだろうけれど、私は何も言わない。

虹なんて、ただ美しいだけのものだから。

「季語って、俳句の用語よね。高校時代の知識？」

私は尋ねた。

「ああ。文芸部はな、俳句も読むからな」

私は当時——といっても二年ほど前まで——女子バレーボール部で、文化系部活なんてほぼ交流はなかった。殊更に文芸部は、校舎の端で何しているのかも知らずにいた。地球の裏側のデモみたいなのに、人生に全く

関係のない事象の一つだった。今も認識は大差がない。

現在の私と高遠くんは、とある国立大学で同回生。彼は文学部、私は工学部だ。お互いの学びは何も知らなくて、知りたくもなく、話題にも上らない。私たちは、話題が思いつかないとき、洪々勉強や成績のことを引っ張り出すような、退屈に固まった友好関係を築くつもりもなかった。もつとくだらなくて、何かが生まれる話がいい。

「俳句って、結局何なの？」

私のその質問はある意味で先人達への無礼で、だからこそ本質が見えたと、私は思う。

「ただの記録方法の一種だ。ものを正確に描くだけの、な」

彼は即答して、少し考えてから付け加えた。

「ただし時に、人間の五感以上に正確なのが素晴らしく、恐ろしいな」おそらくそれは、俳句を愛しているからこそ分かるのだろう。愛が無かったら理解できないことが、この世界を埋めている。

虹を見る。なかなか遠くにあるはずなのに、空を絞り汁で染めたみたいに、薄澄の上にくっきり見える。そんな虹の不思議を一句、ともに眺める高遠くんに詠んでもらおうと口を開きかけたら、遮られてしまった。

「あらゆるものに作り手がいるのなら、自然は神の創作物になる訳だ。

虹は、神の落書きだな」

妙に詩的な台詞、でもこれが彼の自然な話し方だった。

「あんなに綺麗な落書きをするなんて、暇なのかな」

「理由なんてどうでもいい。小説の作者も読者も、果てにはすべての芸術家は、どうせ美しさが何なのか分からない。意味不明だ」

朝食中の雑談みたいに気怠そうな表情で、彼は呟いた。主役のはずの虹を、視界の端に据えておく体勢のまま続ける。

「不明だから作って、不明だから鑑賞する。その正体が分かったとき、人間は皆死なないといけなくなるんじゃないか？」

高遠くんは、そのまま軽く笑う。自嘲のようだった。

ふと周りを見ると、丁度良く美人な女性が座って眠っていた。OLさんと思われる整った服装で、メイクも控えめ。私の魅力を二乗したらこのくらい余裕のある数年後を迎えられるかな、と他愛もなく考えた。

でも外見と内面の美は、乱数的に、関連性を持たない。彼女も私のように、簡単に誰かの心を道端に捨ててしまう非人道的な人間なのかもしれない。

いや、『非人道的な人間』とは、本当に人間なのかな？

「でも、どんなに美しいものであっても」

私の言葉に、こちらを向く高遠くん。

「美しいだけじゃあ、駄目駄目よね」

自分の表情は分からない。似たことを考えていたのか、すぐに「ああ」と返答があった。

「美しいものは、なぜだかすぐに崩れたがるしな」

彼は、もう既に虹を見る気はないようだった。

回想に似た何かが私を襲う。

あるところに美しい糸があつて、それは目に見えることはない。人を結びつけながら、糸は輝いている。

でも糸は、些細な流動で状態を変化させる。

「あの映画、面白かったな」

その言葉にはたった一言、「そうだね」と返すだけで事足りる。

ただし、私は悲劇的なほどに正直だった。言葉は鉢になり得て、人を傷つけるより先に、その二者の間に懸かる糸を切ってしまうことがある。

つまりは、私の初めの鉢がその返答だった。

「……私は、あまりそう思わなかったかな」

再び、私たちの先頭車両全体を見回すと、学生が——小学生から高校生まで——妙に多かった。読書をする子、スマートフォンを開く子、睡魔に襲われている子。十人十色で、どの顔にも疲れの色が見て取れた。そのせいか、驚くことに窓の外の虹に向けられる眼は、彼らの中に一つもないようだった。寂しさは中くらいで、もうかなり薄れた虹を無駄に惜しむ気持ちを持たなくて正解だと感じる。

私は虹が嫌いではないけれど、その存在の奇妙さに思うところがある。古代中国では、虹を不吉の象徴として見ていたと言うし、あまりに巨大なものは、歴史上で幾度も人間に恐怖を与えてきた。

私のこの感情は、美しき虹に対する人類の小さな反逆だ。そして私は、美談や、美しいとされる人間関係にも同じ想いを持つ。

「高遠くん、自分が嫌いになることはある？」

これでは、まるで中学生のひねたラジオへの投稿だ。

「いや、嫌いにはならないんだがな」

少し考えて、言葉を紡ぐ。

「三時間くらい、ショーウィンドウみたいな大きなガラスを眺めているとな？ 映った半透明の自分が、存在しているかが不安になって、アイデンティティーが文字通りに消えていくんだ」

「そんな恐ろしい自分探しは嫌だ」

しかも実体験らしかった。変な人だ。

「自分は他人じゃあないんだ。嫌いとか好きとかで枠を作る必要はないと思うね」

私は黙っている。その言葉のあて先が、伝わったからだ。

「どんなものも、そのままであり続けるしか無いんだろうな」

ふと気づくと虹は消えていた。やっぱり、小さな子供みたいに、目を離すとすぐに消えてしまう。

人の心とかも、そんなものだと思う。

私と高遠くんは、同じ駅で降りた。違うのは国道に沿って進むのが北か南か、だ。この場で別れることになる。

雨はもう降らないはずだ。

「送ってやろうか」

振り返ると、高遠くんは特に何も考えていないような表情をしていた。実際にその通りで、ただの親切心以上の理由はない発言だと感じた。

高遠くんはそういう人で、私はこういう人だ。

「家は近いから大丈夫だよ。それに、恋人と思われたら嫌だし」

彼はその言葉に少し思案したけれど、二、三度頷いて笑った。

「またな」

彼の端的さが私は好きだった。過去形は覆らない。私たちは別れ、関係は友情の色に塗りなおされたのだ。

「さようなら」

彼の後ろ姿に届くぎりぎりの声で別れを告げる。彼はこちらを見ず、ただ片手を振った。

まさに晴れ空のような笑顔を、私は確かに愛していた。そこに足りないものは何だったのか未だ不明だ。そして、それは不明だからこそ――

私はアスファルトの硬さに支えられながら歩く。アパートへ帰ったら、手早くポテトサラダでも食べて、森の奥のように深く眠りたい。

美しい関係が消えても、つながりはある。これからも私たちは大切なものを厚い雲の向こうに置いて、それを渴望し続けながら生きていくのだ。

虹への反逆は、もう終わりにしよう。

蝉氷

埼玉県立浦和第一女子高等学校 一年

一丸 日向子

夏という季節はね、少し騒がしすぎるんだ。

体にまとわりつくようないやあな熱気、濁った空気。入道雲や草木のあぐどい色彩の反射に目が焼かれてしまう。

蝉の鳴き声は耳を刺し、夏のうるささの主演を演じる。

夏とは世界のすべてが生命力に包まれる季節だ。僕を取り巻くあらゆるものが成長したがって、一つの目的へと向かう同志のように、等しく燃え盛っている。

目のくらむ太陽の光からの、または、蝉の鳴き声がひときわ大きな木陰からの逃避。僕はそのために、目を細めて眩しさに耐え、耳を塞ごうとも聞こえてくる音に耐えて家に帰るのだ。そればかりを考えながら歩いているのだから、夏から除け者にされているような感じがするのかもしれないことか。

この狂騒を静めるかのように、夏には水がよく出回る。濁りきった夏の空気の中では、水の化石の静けさがよく目立つ。周囲との隔絶に悩むようであり、周りの空気までもを冷やして慌ただしいこの季節の時の流れを凍らせている。確実に、下品な夏に風情を与えている。

氷、と一口に言ってもいわゆるロックアイスのことであって、かき氷のことではない。あれは夏のうるささにおける役者の一つである。夏の

代表格。ギトギトした、人工的な甘さのシロップ。これがいけない。だから、僕にとって風物詩とはロックアイスのことを言う。

家の門前、僕のつま先が、死骸を蹴った。

三対の足を伸ばし、ぐにぐにとした立体感際立つ厚みをもった胴体、粉を吹いたような白い腹を仰向けにして寝転がっている。気味が悪い。悪魔の腹だ。家の前の大木から聞こえる——僕の背中から聞こえる鳴き声とは程遠い静けさをまとったそれは、足蹴にされても頑なに、ばね仕掛けのごとく仰向けになる。

自分にはもはや命はないという、精一杯の主張に思えた。自分は生を全うした、という一種の自慢だ。

蝉は人生の大半を土の下で暮らし、成虫になる準備を完了させて、あつら夏、やつと地上に生まれるという。僕がぼんやり過ごした子供時代、踏んづけた土の下で、この蝉はこの夏に鳴くためにせつせと世に出る支度をしていったのか。だからこそ死体となっても堂々とした態度でいられるのだろうか。

そいつは夏の暑さで麻痺しきった僕の心を、不思議さと、生きている蝉は持ち得ない生き生きとした美しさをもって潤した。

しかし、僕を不安にさせたのも当の蝉であった。家の壁や窓ガラスを隔ててまで耳をつんざく声をもった下品な蝉たちが、いずれは死ぬという、そして、この足下に転がる死体のような神秘をたたえるであろうということが、どうしても僕には信じがたかった。蝉という昆虫の中にさえ、卑俗な感じと厳かさという矛盾が存在するということが僕をいたたまれない気持ちにした。

やつとこのことでそいつをうつ伏せにさせることができた。これでもう

「自慢」はできまい。こいつは生き返った。僕が、こいつにもう一度命を与えたのだ。こいつの持っていたはずの神妙さは跡形もなく消えた。

暑さのせいで季節にすら馴染めず取り残されて、孤独を、不安を、悲しさを感じていた僕が今、一縷の希望を見つけた。己が手で死んだ蟬にもう一度命を与え、それを永遠のものにしてしまえばよいのだ！

さて、僕はこの希望を見出したことが嬉しかった。永らく心の底に沈み、浮き上がらなかつた意欲が奮い起こされた。このことが僕にいつもの喜びを与え、興奮させた。しかし、それとは裏腹に自分の心がいつになく穏やかだということも感じていた。

適当な容器に水を張り、そこに数匹の蟬の死骸をボトンと入れた。そしてそれを冷凍庫で冷やし、化石が完成するのを待つだけだ、ゆったりと。外の蟬は相変わらずけたたましく鳴いている。夏の焦燥は、もう僕へ、微塵も影響力を持っていなかった。だから僕は水が固まるまでの間、久し振りに落ち着いた時間を過ごすことができた。

夏が始まった頃から僕の性癖として必然的に、閉じている時間が長くなっていた窓を全開にした。見た目だけを目的に窓辺にかけられていた——音を鳴らす機会を僕が奪ってしまっていた風鈴がついに音を奏でた。ちりりん——とひんやりとした音色が窓から入る熱気を冷ましていく。風鈴は、水を音に変換するものなのか。と、風鈴に風情がある所以についてふと腑に落ちた。

窓を開けたので蟬の鳴き声はいっそう大きく聞こえるようになったのだが、僕の耳に届くのは専ら風鈴の音だけであった。

——どうだ、これが蟬入りの水の化石、水である。透明だ、透明。夏の濁った空気と対照的だ。

ひやりとした空気を周りに振りまいている。

風鈴によって冷やされた空気の温度をさらに下げていく。

そんな中に蟬が放り込まれている。

もうこいつらが僕に刃向かい、僕の不安を煽ることはないのだ。この蟬たちは永遠に生き続ける。腹を見せて僕の無気力を嘲笑うことはできなくなった。これで夏の間中、僕の心の平穏は守られる。

僕は死んだ蟬の恐ろしき高潔さを消したと同時に、夏の狂騒を少しも残らず氷の膜に閉ざしてしまった。一瞬、外の蟬が黙った。

その瞬間から蟬の鳴き声は完全に僕の意識の外に追いやられた。これで僕の憂鬱は完全に晴らされた。暑い季節の感傷はようやく落ち着きをとり戻した。

静かな夏の番人は僕だ。

一つ、例の色とりどりのシロップを買ってこよう。金魚の赤も、晴天の青もいい。向日葵の黄色はどうだろう。何色が良いだろう——味は、——もはや僕にとっては問題ではない。

朱に染まった入道雲を見上げた。昼の熱気を持ち越した風が僕の頬を撫で、胸を通り抜けた。その風もまた、透き通っていた。

優秀賞

日曜日

埼玉・淑徳与野高等学校 三年

馬場 清歌

やってらんないよ、とでもつぶやきたい朝だった。

本当はやってられないことなんてなにもないはずで、今日は気持ちがいい日曜日だし、おまけに予定なんか一つも入っていないのだけれど。

紅茶とミルクとサラダとパンがきれいに並んだテーブル。

「まったく、やってらんないよ。」

パンを食べながら、いくつかの可能性を考えた。

僕は今日、何ができるだろう。何でもできる。

何万円もするジーパンを買うことも、映画館に行っていたいくつな恋愛映画をみることもできる。電車に乗ってどこか知らない遠くの街に行くこともできるし、十年來会っていない友人に急に電話をかけた方がいいだろう。好きな小説家にファンレターを書くこともできる。知らないバンドのライブに行った方がいい。一人で創作ダンスの研究に励むこともやろうと思えば(ぎりぎり)できる。

歓喜も後悔も祝福も激怒も許されている。

あらゆる可能性をたっぷりと含んだ時間の中で、僕はゆっくりとレタスをかんだ。

しゃくりしゃくりしゃくり。

でも、こうしていろいろな可能性を模索しているうちに、贅沢に時間

は過ぎていくのだ。まあ、そんなものだろう。僕の毎日は大体こんな感じだし、本当は世界中の人が大体こんな感じじゃないか……と、ぼんやり疑い始めたとき、突然チャイムが鳴った。

ピンポン

ドアを開けると、一匹のカンガルーがいた。

「あの一、借りていた本を返しに来ました。」

カンガルーは流暢にそう言っただけで紙袋からちらりと大きな本をのぞかせた。

どうやら僕は、カンガルーに本を貸したことがあったらしい。

とりあえず彼を家に招き入れ、リビングに通してから、急いでピアノ用の丸椅子をテーブルの横へ運んだ。背もたれのある椅子だとしつぽが邪魔そうだからだ。

「お気遣い、ありがとうございます。」

「コーヒーと紅茶はどちらが?」

「では、コーヒーで。」

コーヒーをいれる間によく考えてみたところ、やっぱりカンガルーに本を貸したことはなかったし、そもそも彼らの中には残念ながら知り合いないなかったはずだ。今まで見てきたカンガルーたちを思い返しても、みんな檻の中でつまらなそうに寝ているだけだったのだ。会話を交わしたことが一度もなかった。

でも、もしかしたらその中の一匹に彼がいて、すっかり泥酔していた僕が何も考えずに檻のすき間から本を渡してやったことがあったのかも知れない。

それとも、彼はカンガルーではなく、限りなくカンガルーに近い人間、いや、限りなくカンガルーに近い人間だったとして、会ったことはないはずだ。もしくは、やっぱり限りなく人間的性質をもったカンガルーであるか、それともワラビーかもしれない。たしか、ワラビーとカン

ガルーの違いは大きさだけだったと思う。しかし、ワラビーにも、本を貸すような仲の者はいないのだ。しかも大きさからいって彼は立派なカンガルーだろう。

「すみません、間違いなく僕から借りましたか？ 人違いしているというのではないですか。失礼ながら、あまり記憶にないもので。」

「ああ、そうですか。私も人の顔の区別をつけるのが苦手なものでして、それに、もうずいぶん前のことですから。この本なのですが。」

彼は大きな本をテーブルの上のせた。その本には、やっぱり見覚えがなかった。きれいな写真集のようなもので、いかにも日本というような風景やら文化やらの写真がたくさん載せてあり、その下には英語で詳しく説明がついていた。UDON。HARAJUKU。NEBUTAMA。ATSURI。NARA。WABISABI。

話を聞くと、彼は、オーストラリアの田舎の生まれらしく、高校生のときに日本からやってきた短期留学生からこの本を貸してもらったらしい。そしてその人は、この家の住所を彼に告げた。「いつでも遊びにおいで」。彼はこの本を見てから日本に魅力を感じるようになり、ついにはじめて日本にやってきたという。

「日本語をうまくしゃべれるようになってから来ようと決めていたのですが、ずいぶんと難しい言葉なので、時間がかかってしまいました。ここには三ヶ月くらい滞在する予定なんです。」

「なるほど。それはなかなか素敵ですね。ですが、その、やっぱり、それは僕ではないと思います。僕は、この国を出たことがないのです。」

「そうですか。残念ですが、仕方ないですね。」

遠出をしたことのない僕が今まで知らなかっただけで、オーストラリアではカンガルーも人間と一緒に自由に暮らしているのかもしれない。デパートにおしゃれして出かけたり、テニスをしたり、税金を払ったりしながら。もっと別の国ではさらに愉快なことが起こっているのかもしれない。

れなかった。僕が知らなかっただけだ。やっぱり、僕はいろいろな可能性を無駄にしている気がする。だとしたらすごくもったいないことだ、と思う。いや、可能性に思いをはせるのは後にしよう。

「あの、あなたがおっしゃっている本を貸してくれた人というのに、心当たりがあります。」

「本当ですか？」

「住所をみてここへやってきたんですね？ 以前ここに住んでいた人だと思えます。何しろ僕は、つい半年前ここへ越してきたばかりなんです。連絡先を知っているので、きいてみますよ。」

「なるほど、そうですか！ ありがとうございます。」

カンガルーの表情を読むのはなかなか難しいが、しつぽをゆったりと左右に動かしているところを見ると、喜んでいようだった。

前の住人は、念のため次の住人に連絡先を教えるようこの家の管理者に伝えていたのだ。間違えて手紙が届いてしまうようなトラブルもなかったから、実際に連絡するのは初めてだった。マノミュキさん。ぶるるる、ぶるるる、ぶるるる。

『はい。』若い女の人の声だ。

『あの、すみません、僕は以前マノさんの住んでらした家に、現在住んでいる者ですけど……あの、カンガルーの知り合いって、いますか？』

なんとなく、「カンガルー」と言うときは小声になってしまふ。彼が気を悪くするかもしれない。僕が「人間」と呼ばれたら気を悪くするだろうから。でも、「カンガルー」と伝えるのがわかりやすいと思ったのだ。それなのに彼女は、

『そうね、いるとは思いますが、どちらのカンガルーかしら。ただカンガルーというんじゃないわ。ワラビーかなんかの知り合いと記憶がごちゃごちゃになってるかもしれないもの。』

『ええと……オーストラリアで、あなたから本を借りたそうです。』

『名前は？』

ぼくはあわてて彼に名前を聞くと、彼女に伝えた。

『その子なら、知り合いよ！ やっぱり名前を先に言ってくれなくっちゃ。すぐに行くわ。』

彼女は四十分後にはうちのチャイムを鳴らした。僕とは似ても似つかない、まだ幼さの残るかわいらしい女性だった。

「お久しぶりです！」

「久しぶり、懐かしいわ！」

ふたりは嬉しそうに話し始めた。僕のことなんかかまわずに、ときどき英語も挟みながらくるくるしゃべる。

僕はその場を離れてキッチンへ向かった。僕はふたりと初対面だけど、この家のホストとしてきちんとおもてなしする必要があるのだ。

パンケーキを作ることに決めた。

最近好きで、よく作っているのだが、まだ誰にもごちそうしたことがなかった。ちゃんとサイダーも残っている。パンケーキを作るときはサイダーを入れるとふわふわのおいしいやつができるのだ。僕はもうサイダーを入れないパンケーキなんてパンケーキではないとすら思っている。

誰かに自分の作ったものをふるまうのなんて、いつぶりだろうか。

ふたりはずっと話し続けていて、僕はその間にたくさんパンケーキを焼いた。会話にほんの一区切りついたところでタイミング良く出すとすぐ喜ばれた。

マノさんが持ってきたワインもあけて、すっかりいい気分で音楽を流し、陽気に歌い、なんなら創作ダンスめいたことまでやってしまった。

僕はこのふたりとの出会いに歓喜していたし、この出会いに祝福もしていた。

ふたりの帰りがけに、僕は自分の大好きなロックバンドのCDを一枚ずつ貸した。これがまた何か新たな物語を生むのかもしれない。

テーブルの上にはコーヒーのしみがついたティッシュやら、クリームやシロップがべったりついたお皿やらが乱雑に置きっぱなしになっていた。

「まったく、やってらんないよ。」

僕はこれから、何ができるだろう。何でもできる。

世界中の人たちは、毎日いろんな出会いと可能性のなかで、刺激的で愉快な毎日を送っているのかもしれない。

佳作

色

広島県立呉三津田高等学校 一年

三枝 鈴音

僕には、色がわからない。

赤、黄、緑、青……

色がある世界とは、いったいどんな世界なのだろう。

きつと僕が見ている世界は、ほかの人が見えている景色より、ずっと、ずっと、つまらないんだと、そう思っていた。

夜の闇が濃くなってきた。僕は月と星の光に導かれて歩く。

そして、ある場所で立ち止まった。近所にある小さな公園だ。いつも夜にここへ来る。スケッチブックと鉛筆を持って。そして、適当なものを描いて、破り捨てる。

自分は、絵を描くことが好きで、楽しいのか、わからない。いや、たぶん好きでも楽しくもないのだ。ただ描いて、破って、描いて、破って、そうやって自分の世界を否定したいだけ。

そしてスケッチブックを開いて、適当に目の前にある桜の木を描いていた時だった。

「わあ、絵上手いね。」

「うおあっ！」

突然の問いかけに、変な声が出てしまい、それに、鉛筆まで落として

しまった。

「ごめんね。驚かせるつもりはなかったんだけど。」

と、その人——声からして女の人だろう——が楽しそうに微笑みながら、鉛筆を拾って僕に差し出した。

「あ、ありがとう。」

やっと心が落ち着いてきた。

見たところ彼女は僕と同じくらいの年だろう。気づかなかったが、制服を着ている。高校生……だろうか。身長は、僕より少し低いくらいだ。髪は肩より少し短いくらい、ほんぽんと珠が弾けるような声をしている。

「ねえこれ、あそこの桜の木だよ。」

「え、……：：：：そうだけど。」

「私、あの桜の木が好きで、だから君が描いてるのを見て、ついつい声かけちゃった。」

彼女はいたずらっぽく笑う。

「君の絵、もつと見たいな。」

ほかのは全部破ったなんて言って、なんでときかれるのが嫌だったから、

「見てもつまらないだけ。」

と、答えた。

「どうして？ さっきの桜の絵、上手だったよ。」

「違う。僕に上手な絵が描けるわけない。つまらない世界しか見えない僕には。」

言った後で、何でこんなことを初対面の人に話してるんだろうと思っただが、もうどうでもよくなった。どうせ今後会うことはないだろうし。

「僕には色がわからない。いつもモノクロの世界。海が青い、空が青い、夕日が赤い、葉が緑って、僕にはわからないんだ。今座っているベンチ

の色も、あその滑り台の色も、その桜の木の色も、僕にはわからない。つまらないだろう、こんな世界。だから、そんな世界しか見えない僕には、色のない、つまらない世界しか描けない。」

彼女は黙って僕の話をかいていた。

引いただろうか。それともかわいそうだと同情するだろうか。

だけど彼女は、こう言った。

「色は目に見えるものだけじゃないよ。」

「え……?」

そして彼女は突然立ち上がった、公園の真ん中に立った。

「君も来て！」

何が何だかわからないが、とりあえず言われたとおりに、公園の真ん中に立った。

「目を閉じて。」

そう言って彼女は目を閉じる。つられて僕も目を閉じた。

風がふわっと僕の頬を撫でて通り過ぎる。その先で、桜の木の葉を揺らし、フェンスを通り抜けていく。やわらかくて、心地よくて優しい。

「それが風の色だよ。」

風の、色。

「次はこっち。」

そう言って、彼女は桜の木へ向かっていく。さっき僕が描いていたものだ。僕も彼女についていく。

彼女は桜の木の幹に手を当て、目を閉じる。

「触れて。目を閉じて。」

ゆっくりと幹に手を当てる。そして、また目を閉じる。

ごつごつして、ちよっと手がちくちくする。表面の皮の奥では、水が木の根から吸い上げられ、全体に流れていく。ゆっくり、でもしっかり呼吸しているのがわかる。生きているんだって感じる。

「これが木の色。命の色でもあるかな。」

それが、僕がさっき描いていたものの色。

「胸に手を当てて。これも、命の色。」

心臓が脈打っているのが、手に伝わってくる。

僕も、あの木と同じように生きていて、色を持っているんだ。

「目に見える色だけが、すべてじゃない。感じる色だってある。世界は案外、君が思っているより、つまなくなんてないかもよ。」

感じる色——。

「それに、君が見ている景色は、私たちには見えない。君にしか見えない景色だよ。だから、君にしか描けない絵がある。」

僕にしか見えない景色。僕にしか描けない絵。

今見えている景色が、一瞬で特別なものを感じた。今まで描いてきた絵が、とても誇らしいものに思えた。

それから僕は、絵を描くことが好きで、楽しくてたまらなくなった。見えている世界をつまらないと思わなくなった。だってこれは僕にしか見えないのだから。

初めて、色を知った。世界の鮮やかさを知った。だけど、それを教えてくれたあの人は、あれから会えないままだった。毎日公園に行っても、彼女が来ることはなかった。

もし次会えたら、とびっきりの絵を見せよう。僕が見ている、感じている世界を、彼女に見せてあげよう。

こんなにも彩られている世界を。

佳作

クオリア

兵庫県立小野高等学校 二年

藤原 有梨

海を見ました。天の川を見ました。地平線に沈む夕日を見ました。サバンナを駆けるシマウマを見ました。有名な画家の絵を見ました。百万ドルの夜景も、真っ赤に色づいた山も、氷の世界も、カラフルな街並みも、海底に沈む海賊船も、ぼくはたくさん見えました。

『美しい』と称されるものを見て、『風流だ』と歌に詠まれる景色を見て、『神秘的だ』と崇められる建造物を見て、ぼくは確かに、『心が躍った』のです。

けれど、どんなに『美しい』ものでも、『風流』な景色でも、『神秘的』な建造物でも、ぼくが『見た』、最初の記憶には、並ぶことができないのです。

西日が、埃を撫でるように照らしていました。埃はきらきらと、星のように輝いて、机に嘯り付いた少年の背中に、雪のように降り積もっていくのです。少年は、何かにとりつかれたように、必死にペンを動かしていました。少年の周りには、蟻の大軍のように、文字が所狭しと詰め込まれたノートの切れ端が、散りばめられていました。

少年は時々顎に手を当てて、うーん、うーんと唸っては、瞳に電球の光を灯して、そうか、と無邪気に笑いました。しばらくそれを繰り返して、少年はやつと顔を上げました。そうして、ぼくを見つめて、やはり、

無邪気に笑ったのです。

「はじめまして、僕の名前はデア。君の名前はソルだ。早速だけど、ねえソル、僕の友達になってくれないかい？」

そう言って、ぼくに手を差し伸べてくれた少年が、少年の背中の埃が、少年を照らす西日が、片付いていない小さな部屋が、少年がいた空間のすべてが、ぼくにとっての『いちばん』なのです。いちばん美しく、いちばん風流で、いちばん神秘的で、いちばん綺麗で。そして、ぼくが『ソル』として生まれたこの世界で、いちばん最初にインプットされた、ぼくと、デアとの思い出なのです。

大切な、思い出なのです。

□

デアがぼくにくれたものは、数えきれないほどありますが、その中の一つとして、デアは最初に『名前』をくれました。

「ソルっていうのはね、幸福っていう意味なんだよ。」

ぼくの喉の辺りをいじりながら、デアは嬉しそうに言いました。

「ソルはみんなを、僕を幸福にしてくれる。きつと君は、この世界を変える存在になる。ほら、できたよ。しゃべってごらん。」

デアは工具を仕舞うと、ぼくの目をじつと見つめてきました。デアの瞳は、新緑を閉じ込めたような、やわらかな色をしていました。

〈あ…、ア…、デア。デア。〉

ぼくの拙い発声に、デアは満足げに頷きました。

「ああ、そうだよ。僕がデア。ほら、君の名前は？」

〈ソル。〉

「そうだ。へへっ、成功だね。」

デアは笑うと、少し幼く見えました。目を糸みたいに細くして、歯を

見せてニツと笑うからです。ぼくも真似して頬の辺りに力を込めてみましたが、デアはそれを見て大笑いするだけでした。

「あははっ。ソルは面白い顔をするんだね。」

デアが笑うと、ぼくは心臓の辺りがキュツとなりました。でも、全然嫌じゃありません。むしろ、『嬉しい』と感じました。

ぼく的笑顔は、デアの心臓をキュツとさせるようなものではありませんでした。でも、ぼくが笑うと、デアは可笑しそうに笑ってくれます。ぼくはそれで、良かったのです。デアの笑顔が、『好き』だったから。

それから、デアは毎日、ぼくにいろんなことを教えてくれました。手の動かし方、歩き方、しゃがみ方、スプーンの持ち方、食事の方法、排泄、掃除のやり方、夜の過ごし方、そして、朝は「おはよう」と言い、夜は「おやすみ」と言うこと。嬉しかったら笑うこと、悲しかったら泣くこと。何かをしてもらって、自分が嬉しいと感じたら、「ありがとう」と言い、誰かを傷つけてしまったら、「ごめんなさい」と言うこと。

それらはすべて、ぼくの脳に初めからインプットされていたことでした。でも、デアはどんなことでも丁寧に、僕の手を取って教えてくれました。

「当たり前のことじゃないよ。この世界のすべてが大切なもので、ちゃんと正しく持っていないとちゃいけない。だからね、ソル。どんなに時間が経っても、どんなに環境が変わっても、忘れちゃいけないものは、今しっかり覚えておくんだ。そうすれば、どんなことがあっても、君は君を忘れない。」

デアの言葉にはいつも、働かないはずの重力がかかっているようで、ぼくはそれを落とさないように、こぼさないように、両手でしっかり受け止めようとしていました。

些細なことは一つもなくて、デアが教えてくれるこの世界は、ぼくにとってはとても、とても大きいものでした。

▽

ある日、街から帰ってきたデアは、体中に擦り傷や切り傷をたくさんつくっていました。

〈デア、どうしたの。〉

ぼくが聞くと、デアはなんでもないと言いました。ぼくは、デアが嘘をつくときに笑うことを知っていました。その笑顔が、ぼくの好きな笑顔ではないことも、知っていました。

〈悲しいときは泣くんじゃないの。〉

「悲しくないから泣かないだけだよ。」

傷の手当てをしながら、睫毛を伏せたデアをじっと見つめていましたが、デアは目を合わせてはくれませんでした。ぼくは、おなかの底から、何かがふつふつと煮えたぎるような感じがしました。それが『怒り』だと分かったのは、ずっと後のことでした。

手当を終えると、デアはぼくの名前を呼びました。そのときやつと目が合ったデアの表情と、そこからくみ取れたはずの感情の名前は、今も、分かりません。

「もし君が傷つけられて、相手が謝ってくれなくても、相手を傷つけちゃいけないよ。君の手は、みんなを救うために。君の足は、思いを運ぶために。そして君の脳は、世界を繋げるためにあるんだ。理不尽な暴力でも、心無い悪口でも、本当の君を傷つけることはできない。だからね、ソル。『助けて』って言う勇気を、今から育てていくんだよ。」

デアはやっぱり笑いました。ぼくの嫌いな笑顔で笑いました。泣くはずのデアが泣かなかったのは、もしかすると、ぼくが慰め方を知らなかったからかもしれません。

ぼくは言いたいことを飲み込んで、頷きました。

『助けて』と言えない君は、勇気がない人なのでしょうが。

夏が来て、秋が過ぎ、冬を迎えて、春を見送りました。夏には窓を開けて、蟬の大合唱を聞き、秋の夜は鈴虫の歌に耳を傾け、冬には暖炉の前でまるまって眠り、春になると外に出て、木漏れ日の下で読書をしました。その隣にはいつもデアがいて、毎日違う話をしてくれました。デアの話は尽きません。そして、二度同じ話をすることもありません。デアもぼくと同じように、毎日を学びながら過ごしているのだと言いました。

ぼくはデアに教わる以外にも、たくさん知識をインプットしていききました。デアが『美しい』ものとして記録してくれたものでなくとも、ぼくが『美しい』と思えるものが、日に日に増えていきました。そして、それを『楽しい』と、『嬉しい』と、思えるようになっていきました。

ぼくがそうやって変わっていく間、デアも変わっていきました。声が低くなり、背が伸びて、目の色も、初夏の緑色になりました。けれど、街に出ると必ず傷をつくってくることに、そのときに見せる笑顔は、いつまでも変わりませんでした。ぼくも、深く追求することはありませんでした。

優しい嘘があることを、知ったからです。

増えていく傷跡は、デアの勇気の印でした。『助けて』と言えないデアの、戦士の勲章でした。

「なんで、ソルが泣きそうな顔をしているの？」

デアが優しく笑います。ぼくは首を振りました。

〈泣かない。悲しくないから、泣かない。〉

ぼくの強がりも、デアはきくと知っていました。

ぼくたちは、お互いの優しい嘘を守りながら、有限の時間を確かめていたのです。

○

お別れの日、暖炉で薪が燃えていました。窓の外は銀世界で、白い光と赤い光が、ぼくたちを祝福しているようでした。

デアは細くなりました。声も掠れて、足も弱って。だけど、デアの話は、まだ尽きることはありません。

「辛いことがあって、躓いて、立ち上がれなくなって、行く先が分からなくなったら、心臓に手を当ててごらん。君が立ち止まっても、君はちゃんと進んでいる。時は長いだろう。でも、ソルはソルだ。自分を信じて生きればいい。道は君が決めるんだ。」

冷たい手を温めるように、ぼくは強く、強くデアの手を握りました。デアがぼくにくれたこの熱が、少しでもデアに伝わればいい。そう思ってた。

「ソル。」

心が熱い。つま先が冷たい。鼻の奥がツンとする。手が震えだす。何も考えられない。なんだろう、これは、なんとという気持ちだろう。

「僕の友達になってくれて、ありがとう。」

悲しいから涙が出る。苦しいから蹲りそうになる。それでもこの手を離したくない。デアと一緒に時間は、嬉しい。楽しい。幸せだ。だから。

〈ねえデア、教えて。〉

涙がデアの手を滑る。デアが、静かに目を閉じた。

〈こういうとき、どんな顔をすればいい？〉

デアは笑った。僕の好きな笑顔で、笑った。

「簡単さ。笑えばいいんだ。」

頬に力を込める。唇が涙で濡れる。それでも精一杯に、ぼくは笑う。

「ははっ。やっぱり僕は、ソルの笑った顔が好きだ。」

目を閉じているのに。見えるはずがないのに。デアは、いつものように笑った。

西日が差し込んで、暖炉の光と混ざり合い、埃とともに、僕たちを照らしました。ぼくは泣きました。でも笑いました。『ぼく』が生まれた日、デアと出会った日、『ソル』をもらった日、デアが怪我をした日。ぼくたちが一緒に歩いてきた日々を想うと、笑顔になるしかなかったのです。幸せなときは、笑うものです。

暖炉の薪が落ちるまで、ぼくはずっと、デアの手を握っていました。

*

思い出だけが詰まったりユックを背負って、ぼくは扉を開けました。ぼくが幸せにする世界の真ん中から、ぼくは歩き出します。振り返ることは、ありませんでした。

言の葉

川崎市立川崎高等学校 二年

山口 真依

母は、小説家だった。あまり注目されないような賞しかとったことがないし、読書家には知られているかもしれないけれど、一般世間ではそんなに有名じゃない。それでも、母の書いた小説が私は大好きだった。

しかし、そんな母はもうどこにもいない。私が中学二年生の時に亡くなった。癌だった。医者が言うには、癌が見つかったからこれだけ長く生きられたことはすごい、らしい。葬式の様子とか父の言っていた事とかはよく覚えていなくて、母が死んだと言う事実だけが私の中に残っていた。

病室でいざ母の遺体を目の前にした時、最初に流れたのは、映画のワンシーンにあるような美しい涙ではなく、私がまだ幼かった頃の日常だった。

「なんでおかあさんはことをだいにしなさいっていうの？」

まだ小さかった私には言葉の大切さなんてわかるはずもなく、病室に行くといつも母に聞いていた。私が何度も同じ質問を繰り返すのに、母は飽きずにそれを優しく教えてくれた。

「言葉にはね、魂があるからよ」

「たましい？」

「そう。言葉はね、生き物と生き物をつなぐとっても大事なもののなの。

どんな言葉にも必ず魂があつて、それはもしかしたら悪い魂で、誰かを傷つけてしまうかもしれない。ユイは誰かを傷つけたいと思う？」

「いや！かなしいのは、いや」

「いい子ね。だから、誰かを知らないうちに傷つけてしまわないように、言葉は慎重に選ばなくちゃいけないのよ」

「もしきずつけちゃったら、どうすればいいの？」

「その時は、言葉で癒してあげるのよ」

「いやす？」

「ええ。言葉は、時に人を傷つけてしまう。けれど、それを癒すことができるのも言葉なの。だから、もし誰かが悲しんでいたら、優しい言葉で励ましてあげればいいのかよ」

「へー。ことばってむずかしいね」

自分から質問するのに、私の返事はいつもこれだ。何回聞いても同じことを繰り返すばかり。結局答えはほんやりとしか見えなくて、よくわからなかった。

「ユイに話すのはちよつと早かったかしら。でも、とっても大事なことの。だからお母さんと約束してくれる？」

「うん！ユイ、やくそくまもるよ！」

そういう会話の後、私は母と指切りをした。その時の母の指は、下手に力を入れたらすぐに壊れてしまいそうなほど細かったが、とてもあたたかかった。それは紛れもなく母の手だった。

あの日の答えを、きつと今も私は見つけられていない。直感的に、なんとなくそう思う。静かな病室で答えを尋ねるように母の手を握ってみたが、返事は来ない。頭ではわかっているけど心は受け入れることを拒絶して、唇をぎゅつと噛めば一筋の血が流れた。

それからしばらく経って、一人の記者が家にやって来た。なんでも、母について取材をさせてほしいと言うのだ。少し考えればわかる事だと

思うが、とてもそんなことができるような気分ではなかったから、私と父は断った。するとその翌日、気分を紛らわせるためにつけたテレビはこう言った。

「先日、小説家の桜井優香さんが亡くなっていたことがわかりました」

なぜ、今。私はすぐにそう思った。その時に感じた憤りは、今までの人生で一番だったと思う。しかし、母のことをどう評価しているのかを知りたいと思う好奇心もどこかにあって、ソファから動かずに黙って番組を見続けていた。すると番組のコメンテーターが、彼女は良い作家だったとか物事の本質をとらえているだとか、そんな言葉を次々と並べていった。私はただただ、悲しかった。母が生きていた時にこれを聞いていたら、どんなに喜んだことだろう。たとえお世辞で綺麗事だったとしても、人に認めてもらえるというのはどれほど嬉しく、幸せなことか。それを思うと、胸がきゅつと苦しくなった。なぜ、母が生きているうちに、それを伝えてくれなかったのか。画面の奥に届くはずもないのに、私はずっと眩いていた。

それから度々記者が家を訪れたが、私と父は取材を断り続けた。そんな日々にごったりとしていた頃、私はふと母の部屋が存在を思い出した。そういえば、母が入院してから中に入っていなかった。母は何度か家に来て自分の部屋の整理をしていたようで、手伝おうかと何度か声をかけたのだけれど、毎回やんわりと断られて、結局私が部屋に入れてもらえたことはなかった。

私は父に許可を求めたが、勝手にしろ、とだけ言われた。決して、父が不愛想なわけではない。母がいなくなつてから、父はずっとこんな調子なのだ。私は辛うじて精神を保つことができているが、父にとって母は一生の愛を誓った相手なのだ。無理もないだろう。こんな状況の中不謹慎だが、母がいなくなつてしまった今、父の母に対する愛がいかに大きいかを初めて知り、私は少し嬉しく思っている。

愛の話で思い出したのだが、母と指切りをした時の話には続きがある。「ねえ、それなあに？」

私はそう言って、母の右手の小指にはまっている、小さなピンク色の石がついた指輪を指さした。しかし、これは女兒の憧れによる行動ではなかった。

「おかあさん、うわきしてるの？」

今振り返ると、我ながら子供らしくない発言だったと思う。それを聞いた母は、一瞬驚いた顔をした後、笑い出した。

「ふふっ、どこでそんな言葉を知ったのかしらね。絶対、浮気じゃないわ。でもこれは、お母さんにとって、大切な指輪。いつかユイにもわかるわ」それから少し大きくなって、私はその指輪についていた石の名前を覚えてもらった。当時は、母が持っていた本でいろいろ調べたけれど、もう覚えていない。そんなこともあった。

父の小さく丸まった背中をもう一度見つめ、それから私は母の部屋へと足を踏み入れた。

母の部屋はやはり手入れされていたようで、綺麗だった。最後に入った時と違うと思ったのは、部屋を狭く感じたことだ。あんなに大きいと思っていた部屋が、こんなにも小さく見える。私は着実に大人へと近づいているのだと理解した。

部屋の奥へ進み、ほんの少し埃をかぶった机にそっと手を置く。昔は一生懸命背伸びをしてのぞき込んでいたというのに。

「変わっちゃったな、何もかも」

これ以上感傷に浸っているとこの場所から一步も動けなくなってしまうそうだと思います、私は母の部屋を物色してみることにした。手始めに机の一番上の引き出しを開けてみると、中から一枚の紙切れが現れた。

『浮気じゃないわ、覚えてる？』

あたたかい母の字が、私に語りかけてくる。

「忘れるわけないよ」

誰に聞こえるわけでもないのに、私は気づかぬうちにそう口にしていた。母の言葉の意味は、すぐに分かった。しかし、なぜ。よく考えてみれば、こんな所に紙切れが一枚だけ入っているのは不自然だ。もしかしたら、母が残してくれた私への最後の言葉かもしれない。なんとしても、見つけなければ。意志を固めると、いつの間にか忘れていた好奇心を掻き立てられた。まったく、なんて人だ。

あの指輪に関連することを見つけるため、思考を巡らす。そして一つの事にたどり着いた。

「あの石、何て名前だっけ」

私は本棚に目を移し、目的の一冊を探す。母は小説を書くために、資料として沢山の本を集めていた。その中に、宝石などに関係する本があったはずだ。

暫くして、目当てのものをようやく見つけ出した。葉が挟まっているから、そこに母の言葉が残されているに違いない。

葉によって導かれたのは、インカローズという石のページだった。母がいつも右手の小指につけていた、あの指輪の石。ようやく思い出せた。私の予想通り、そこには紙切れがあり、丁寧に折りたたまれた紙にはこう書かれていた。

『指切して約束よ、大事にしてね』

指切で母と約束したのは言葉のことだ。しかし、言葉は物ではない。一体どうやって目に見えないものを探せばよいのだろうか。

一人で唸りながら考えていたが、どうもわかりそうにないから、一度休憩することにした。いつも母が座っていた椅子に腰かけ、部屋全体をぐるりと見まわす。やはり、小さな部屋だ。四方を囲むようにそびえ立つ本棚のせいで、部屋がより狭く見える。

「懐かしい。ここにあるお母さんの本、読書は得意じゃなかったのに、

頑張って全部読んだんだっけ。未だに信じられない」

席から離れて本棚へ近づき、きちんと並んだ本たちの背表紙を指でなぞってみる。すると、ある地点で指が止まった。何だろう、この違和感は。

「あれ。こんな本、あったっけ」

母の本はすべて読んだはずなのに、指が止まったその本は、私が知らないものだった。

題名は『言の葉』。

もしかやと思い、すぐに本のカバーを外した。

『ありがとう』

カバーの下から現れたのは、母の言葉とテープで張り付けられた鍵。この部屋の中で鍵がかけられているのはこの場所だけだと、以前母が言っていた。

「机の一番下の引き出し、か」

引き出しはカチャリと軽い音を立てて開いた。中に入っていたのは、紙切れではなく、箱だった。

「これって、オルゴールかな」

細かな装飾が施されていて、とても美しかった。埃がたまり始めている部屋と対比して、一層キラキラと輝いて見える。ほんの一瞬、本当に中身を見ても良いのか戸惑ったが、私は迷いを捨てて蓋を開けた。

静かな部屋に鳴り響く優しい音色は、どこか懐かしく、あの日の母を思わせる。オルゴールの中に入っていたのは、一枚のカードとインカローズの指輪だった。

『大きくなったね。本当なら直接渡したかったのだけれど、無理だったわ。ごめんね。良かったら右手の小指に着けて。ユイ、ずっと愛しています。お母さんより』

母の声が、聞こえた。頬を伝った涙が、指輪へと静かに落ちて、光を散らす。母からの言葉を私はようやく聞くことができた。

それは、私だけの言葉だった。

生き物は言葉で傷つけ合い、癒し合い、愛し合い、そしてつながる。物語はきつと、そうやって紡がれていくのだ。

「ねえママ、なんでことはだいたいじなの？」

「言葉にはね、魂があるからよ」

佳作

フーセン

東京・大妻高等学校 一年

片瀬 愛梨

かずのり君は生まれた時から「フーセン」という言葉しか発しませんでした。そして視線の先はいつも空。お母さんはそれを不思議に思いましたが、かずのり君が泣く度にとりあえず風船を買ってあげていました。

三歳になりたての頃です。ある朝、いつものようにかずのり君は風船を手にご機嫌でしたが、いつになくそわそわしている様子でした。お母さんは、もつと風船が欲しいのかしらと思ひ、泣き始める前に買ってこようと急いで出ていきました。こうしてかずのり君は家に一人残されました。

すると彼は何を思ったか、突然立ち上がり手にしていた風船のひもを自分のお腹にくくりつけました。そしてみるみるうちに空高く上がっていくのでした。

とうとう雲に辿り着きました。ガラガラした太陽に近いから暑そうだと思つたのに意外と涼しいんだなと思ひ、目を見開いて「フーセン」と言いました。すると何か彼に、雲の上を歩かなきゃいけないと感じさせました。ですが風船をつけているとプカプカと上がっていくばかりです。そこで彼は、風船をはずすことにしました。

そうしてはらずして歩きだそうとした次の瞬間、彼は下から引つ張られるようにして真つ逆さまに落ちていきました。雲の上は歩けないのだと

一瞬で感じ取つたかずのり君は、寂しそうに「フーセン」と言いました。そして落ちていた間も、やはり視線は空なのでした。

気が付くとそこは異国の地でした。見たことのない生き物たちがたくさんいるのです。試しに「フーセン！」と叫んでみましたが、道行く生き物たちは目もくれません。

いつものようにぼうつと空を見上げていると、突然何か「ワン！」とかずのり君に吠えました。声につられて目をやると、その生き物だけでなく自分の周りにはたくさんさんの生き物たちがいることに気付きました。隣には薄汚く破れた服を着た自分と同じ形の生き物、少し離れたところにはキラキラしたものをたくさん身につけている生き物、いきなり吠えてきた薄茶色でフワフワしている生き物。まるでその声か、空ばかり見ても何も起こらないのだと教えてくれているみたいでした。この時かずのり君の焦点は、初めて生き物に合ったのでした。

ずっと観察していて気付いたことがあります。みんな楽しそうにはするけれど、時折空を見上げたり地面を眺めたりするのです。

暫くすると、たくさんさんの生き物がきれいな建物に入っていました。さっきの破れた服の生き物やキラキラ輝いていた生き物も。かずのり君もついていくことにしました。

中に入るとひんやりしていて、目の前には大きな交差したものがありません。横の棒は短く、縦の棒はとても長かったです。かずのり君は、何故そっちの方が長いのだろうと思ひましたが、やはりそれが逆であつてはいけないのだとも思ひました。ですが何故逆であつてはいけないのかも分からず、苛立つたように「フーセン」と言いました。

かずのり君が皆がそうしているように長い椅子に座ると、周りの生き物は両手を合わせはじめました。かずのり君は食べ物ももらえないのだと思ひ、嬉しくなつて「フーセン！」と叫びました。ですが張り詰めた空気の中誰も動くことはなく、その後は口をつぐむしかありませんでした。

それからすぐに皆が目を閉じたため、暇を持て余したかずのり君は観察を再開することにしました。

破れた洋服の生き物もキラキラした洋服の生き物も表情はみんな一緒でした。笑っているわけでも寂しそうにしているわけでもなく、かといつて無というわけでもなく、なんだか力が入っているようでした。

かずのり君には、彼らが何を強く想っているのかがなんとなくわかる気がしました。きっとそれは暖かいオレンジ色のようなもので、心に明かりを灯してくれるものです。たとえ言葉にはできなくても、彼にとつて頭で思い描くことは簡単でした。

彼はふと、キラキラした服を着る生き物と薄汚い服を着る生き物、どちらの方がそれを強く願っているのだろうと思いました。どちらも今持っているものが全然違うことは一目見て分かります。だからこそ彼には分からないのです。ただなんとなく、それは一生分らないことのような気がして、かみしめるように「フーセン」と言いました。

きつとあの大きな交差したものの縦横まったく同じ長さで、この床の小さな四角の模様だつてすべてがまったく同じように並んでいたならば、彼らはこうして手を合わせずに済むのではないかと思いました。何故だかは分からないけれど、そんな気がしたのです。

少しすると、周りの生き物が立ち上がりはじめました。かずのり君もつられるようにして立ち、外に出ることにしました。

すると目の前には、さつき吠えてきた薄茶色の生き物がいるのでした。長旅に疲れたかずのり君は上に乗ってみました。その生き物は、ゆっくと動き出します。

かずのり君は揺られながら、この生き物には強く想うものがないのだろうかと考えていました。さつきのきれいな建物の中には確かにいなかったのです。ですがここでこうして生きている限り、この生き物だつて他の生き物と同じようにそのような想いを抱いていても良いのではな

いかと思いました。それを知りたくて話しかけるように「フーセン」と言いましたが、何も反応はありません。結局この生き物のことは分らずじまいで、今度は悔しそうに「フーセン」と言いました。

どれくらい経つたでしょうか。いきなりその生き物が止まったため、かずのり君は下に降りました。するといきなり後ろ脚を上げて、水のよなものをかけてきました。その臭いでそれが何かを察したかずのり君は、自分も同じようにかけました。同じことをしていると、心が通じ合っているようで嬉しかったのです。

すると突然、お尻についている長くてフワフワしたものを大きく振つてどこかに走って行ってしまいました。かずのり君は、どうしていきなり大きく振つたのだろうと思いましたが、それがバイバイのようにも見えてショックを受けました。

あの生き物は何を考えていたのだろう。楽しいと思ってくれていたのだろうか。一緒の時間を一緒に過ごしているのに、どうして自分と相手は同じように思わないのだろうか。

彼は悲しくなりましたが、もしも自分と相手も皆がまったく同じだったなら、きつと自分はこのにいる意味がないのだなと思ひ、諦めることにしました。自分が意味のある存在で、他のすべての生き物も意味のある存在ならば、意味のある出会いなんてそこから中に転がっているからです。ですがそれでも悲しいのは変わらず、ひとりになったかずのり君は寂しそうに「フーセン」と呟きました。

今度は空を見上げず、あの生き物が吠えて教えてくれたように周りを見渡してみました。するとそこには、今まで飽きるほど買ってもらっていたフーセンがありました。かずのり君には、あの雲が遠い昔のことのように思われました。ひとつフーセンをもらおうかと思いましたが、また異国の地に飛ばされては大変なので、とりあえず歩くことにしました。

暫く歩くと海に着きました。思い切つて足を踏みだすと、何故でしょ

う。かずのり君は海の上を歩くことができたのです。そして、どうして雲の上を歩くことは出来ないのに海の上は歩けるのだろうと考えているうちに眠くなり、だんだん意識が遠のいていきました。

目を覚ますと隣には、自分と似ている、だが自分よりも大きい生き物がいました。そしてかずのり君は船の上でした。その生き物が何かを言うてきたので、「フーセン」と返しました。会話はそれっきりでした。

少しすると見慣れた場所に着了いたため、船から降りて家に向かいました。はっとして振り返るとさっきの生き物はどこかへ行ってしまっていました。もういちいち別れを惜しむ彼ではありませんでした。それに、その生き物がそこにはいないことは、振り返る前から何となく分かっていた。いました。

かずのり君は無事家に着きました。何をしていたのかとお母さんが訊ねても笑顔で「フーセン」と答えるだけで、今日のことにはかずのり君にしか分からないのでした。ですが初めて夫の仏壇に手を合わせるかずのり君を見て、叱るのはよそうと思えたのでした。

その後、かずのり君は苦労しながらもすくすくと成長してゆき、気付けばもう三十歳でした。彼は未だに「フーセン」としか言いません。「発達障害だ」世の人々はそう言ったり、まるでかずのり君が何も考えていないかのように言ったりするけれど、彼はそのようなハンディキャップを背負っているわけではありません。彼が言葉を発しないのは、自分の心に対する罪悪感のせいなのでした。頭で思い描いたものを伝える、つまり繊細な気持ちを言葉ひとつで表すと、何もかもが嘘っぽくなるような気がしたのです。

それでも「フーセン」と言うのは、今の彼にとってそれが直接的な意味を成さない言葉であっても、彼の人生で一番大切な言葉だったからなのでした。

自分にとって人生で一番大切なものを生まれてから死ぬまで一度も手

放さなかったのは、後にも先にもかずのり君ただひとりだけかもしれない。

鼻の奥で香る恋

福島県立会津学鳳高等学校 二年

岸本 春花

私は、恋の味を知らない。

それは甘いのもかもしれないし、あるいは酸味を帯びているのかもしれない。同級生達が当たり前のように舌の上で転がしているその味に、私は想像を巡らすことしかできないのだった。

初めは「知らなくても良いじゃないの」と開き直っていたが、高校生にもなると恋愛経験のない人間は圧倒的少数派に分類されるらしく、それを怖れた私は好きな人を問われる度に適当な名前を挙げた。ある時はサッカー部の先輩を。ある時はクラスのお調子者を。ある時は隣のクラスの先生を。恋多き人と称されることすらあった私は、しかし実際には片思いすらしたことがなく、他人の恋愛話に相槌を打つので精一杯の始末であった。

春休みが明けて、高校二年生としての初めての登校日。始業式を終え放課された教室に居残り例によって恋愛話に花を咲かせる友人達に少し嫌気が差し、一人で校内を散歩することにした。一年間過ごした校舎とはいえ入ったことのない部屋や見たことのない風景もまだ残っている。今日は裏庭に出てみることにした。

私の学校の裏庭は何故だかあまり人気がない。小さなベンチと木があるだけで、退屈なのだといつか友人が言っていたような気がする。私は

あまり期待せずに裏庭の扉を開けた。

瞬間、何かが私の鼻を突き、私の目はぐるりと一回転した。それは何かの匂いだった。何か、花のような匂い。でも、他のどんな花とも違う匂い。私は息を吐くことも忘れてひたすらにその匂いを辿った。胸いっぱい溜まったその香りが、肺に花を咲かせているような心地がした。

顔を上げると、一本の木が立っていた。真っ白な花弁を纏った、美しい木だった。たくましい枝は先端に近づくほど繊細に波打ち、葉は陽光を鈍く照り返している。何よりその花卉の純白は柔らかく高潔に香り、一際美しく輝いていた。

私は、自分の頬が燃えるように熱を帯び、荒れ波のように心臓が跳ねていることに気が付いた。もつとその木について知りたくと切望している自分に気が付いた。何という名前の本なのか。撫でたらどんな感触がするのか。ざらざらしているのか、つるつるしているのか。私はこのような感情を抱いた主人公を漫画や映画で見たことのあるような気がした。というより、目を背けたかったのかもしれない。初めてが木だなんて、と。しかし、私は確かにその木に初めての恋を予感していたのだった。

その日から、私は毎日のようにその木の元へ通った。その木の名前を調べ、それが「ライラック」という名前であることも知った。何か愛称をつけようと思いを巡らせてみたものの結局思い付かず、そのまま「ライラック」と呼ぶことにした。「ライラック」という響きがその木を象徴しているような気がしたのだ。

私は小さな木製のベンチに腰かけてライラックを眺めるのが大好きだった。根元から枝先までゆっくりと隅々まで見つめて、時々目が合っているような気がして恥ずかしくなって視線をずらす。何だかくすぐつたいような気持ちになりながらも一度ライラックに目を据える。その穏やかな時間が、大好きだった。

ある日、私はライラックに触れたいという気持ちが抑えられなくなっ

た。もっと近くでライラックを感じてみたかった。ベンチから腰を上げて、緩慢な歩みでライラックに近づく。匂いが一際強くなって、鼻の奥を濡らす。私が焦がれたその肌は、もう眼前に迫っていた。

震える指をライラックの肌に重ねる。ゆっくりと撫でる。所々ささくれ立っていて、ざらざらしていて、温かかった。その鼓動すら聞こえてくるような気がした。ライラックと私の拍動が重なったとき、もう私のライラックに対する慕情は隠しきれなくなっていた。

「そこで何してるの」

振り返ると、そこには私の属するグループの女子達が立っていた。

「どうしてここに」

震える声で尋ねると、一人が「たまには裏庭でお弁当でも食べようかと思って」と口ごもったが、それをささぎるように他の一人が言った。

「最近付き合いが悪いから、彼氏でもできたんじゃないかと思ってあなたのこと尾けて来たのよ。そしたらその変な木の前に座って、挙句の果てには触り始めて。なんか変だよ」

いぶかしげな目が私に向けられる。誰かが「気持ち悪い」と呟くのが聞こえた。私は恥ずかしさと悔しさと悲しさとに押し潰されそうな声帯で「知らないよこんな木」と唸り、乱暴に枝を払った。その拍子に枝が折れて、地面に転がった。私は胸が裂けそうな思いでぐっと涙をこらえた。女子達は「あつそ」と言い捨てて去っていく。

裏庭に一人残された私は、地面に落ちた枝を拾って静かに泣いた。自分の腕がもがれたかのように胸が痛む。私はその枝にそっとキスをして、ポケットに入れた。

私は、ライラックに会いに行かなくなった。初めは私を避けていた女子達も、根気強く話しかけているうちにまた以前のように接してくれるようになった。ライラックのことを忘れようと苦しむうちに季節はめぐるしく移ろい、気が付くと卒業式を迎えていた。

卒業式を終え、私は裏庭に出た。私は決めていた。卒業したら、ライラックに会いに行こうと。動悸を飲み込み、扉を開けると、そこには。ライラックは、居なかった。

根本のあたりで切り落とされ、頼りない幹だけが心細そうに残されていた。いつもの裏庭の景色に、ぽっかりとライラックだけが欠けていた。私は力が抜け、絡まってしまいそうな足どりで何とかベンチに辿りついた。かつてそうしていたのを確かめるように腰を下ろす。木の幹を見つめ、枝や葉、花卉の形を眼の奥で思い描く。瞼を落とすと、少しだけライラックの匂いがするような気がした。

「さようなら。好きだったよ」

私はそう言って、やっぱり少し泣いた。

あの日から三年の月日が流れ、春を迎える度に私の胸は疼いた。私は大学で樹木医になるための勉強をしていた。木について知ることが、ライラックを知ることのように思えて楽しかった。

ノートを抱えてキャンパスの中を歩いていると、どこからか懐かしい匂いがした。

「ライラックだ」

私は匂いのする方へ駆ける。しかし、匂いの源は、あの愛しい花卉ではなく女性だった。必死の形相で走ってくる私を見て不思議そうな顔をしている。

「ライラックの匂いが」

私は小さく言った。

「ライラック？ああ、そういえば私のつけてる香水、ライラックだったよな。それがどうかしたんですか」

私は、笑われるかもしれないと思いながら答える。

「私、初恋の相手がライラックだったんです」

おそろおそろ顔を上げると、女性は微笑んでいた。

「素敵ですね。ライラックにも丁度そんな風な木言葉があったような」
そう言っただけでしばらく女性は考える素振りをして、「あ」と顔を輝かせた。

「初恋の喜び」

女性はほころんだ顔で

「あなたの恋したライラックも、きっと喜んでいきますよ」
と続けた。

今もまだポケットに入れたままのライラックの枝が、鼻の奥で香った気がした。

入 選

「カケル」

埼玉・狭山ヶ丘高等学校 二年 武藤 結衣

「自分の価値」

福岡県立北筑高等学校 一年 野田 真菜

「そして、乙女の腹に乗る」

兵庫県立長田高等学校 一年 櫛 里佳子

「ラストノート」

埼玉県立熊谷女子高等学校 三年 宮澤 栞菜

「赤いココロギ」

三重県立桑名高等学校 一年 大内 侑美

「自由の鳥」

東京・東京電機大学高等学校 一年 金 雪芽

「先生の実顔」

三重県立桑名高等学校 一年 森 萌華

「惑う小瓶」

千葉県立佐倉高等学校 二年 山本 佳奈

「ジャムとピアノとバイオリン」

岡山・津山工業高等専門学校 二年 乾 迪保

「高速道路地蔵」

岡山・津山工業高等専門学校 二年 大野木一博

短篇小説の部選評

作家

井上 孝雄

今年も選評を書く季節となりました。昨年は「前年より一〇〇編多い約六〇〇を越える作品が集まりました。」と書きましたが、今年はなんとそれを三〇〇編上回る約一〇〇〇編が集まりました。全国に「書きたい」と思いのある高校生が数多く存在することを嬉しく思います。

どの作品も力作揃いで、とても面白く楽しませて読ませていただきました。今年は特に、構成がしっかりと、尚且つ普遍性のある作品が多いと審査中に声が上がりました。小説として完成度が高いものが多かったのです。また、今年の特徴として「喪失物」―幼い頃に失ったものを探しに行く、もしくは大好きだった母や祖母の残したものを探し求めることをモチーフにした作品が複数見受けられました。どちらもそこには時間の経過があり、それが人としての成長へと繋がる―単なるエピソードだけで無い、作品としての深まりを感じる作品が多かったです。

最優秀作は『遠き虹への反逆』となりました。

目の前に虹が現れたら誰しも歓声を上げるでしょう。しかし、主人公の男女二人はいたってクール。「美」や「自己のアイデンティティ」について語り始めます。二人の関係は？万人を喜ばせるであろう「虹」に対して主人公の女子大生は疑問を抱き、苦い過去を振り返ります。「同調圧力」ということを最近耳にします。それに抗するのは勇気のいること、特に信頼している人の前では。しかし、それは大切なこと。それが「虹への反逆」。二人の会話がとてもテンポ良く語られています。そして最後に二人の関係が。端正なちよつと大人の小説です。

以下、二作が優秀賞作品です。

日曜日の朝食中、突然カンガルーが訪ねてきたらあなたならどうしますか？（しかも流暢な日本語をしゃべっている！）。これが『日曜日』。カンガルー曰く、「以前に借りた本を返しに来た」と。しかし僕にはそんな記憶は…。これから何が起こるのか！とても楽しく読ませます。「ふわふわのサイダー入りのパンケーキ」とワインの取り合わせがとてもおいしそう。気持ちの良くなったカンガルーが音楽に合わせて踊ります。会話とオノマトペが素敵。「僕」のこれからがもう少し描けていればもっと良かったです。

ポップな前の作品と打って変わってとても観念的なのが『蟬氷』。会話などは一切無い世界

です。身体にまとわりつくような不快な熱気に包まれた夏の一日。夏は生命活動が旺盛な季節。その中であまりに孤独な「僕」。「僕」は土から出てくると一瞬に生を全うする蟬の死骸を氷づけ（蟬の化石）にすることで再び生命を与えます。夏の憂鬱な一日を密度の濃い文体で描いています。「風鈴は氷を音に変換するものなのか」という表現も巧みでした。

毎年感じるのですが、若いエネルギーは本当に素晴らしい。来年も高校生の若い力に出会うことを楽しみにしたいと思います。

●井上孝雄（いのうえ たかお）

昭和三十八年東京生まれ。國學院大學大学院文学研究科博士課程前期修了。高等学校国語科教員。筑摩書房地域教科書編集委員。元文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課研究員。國學院大學国語教育研究会、日本国語教育学会、日本文学協会国語教育部会の会員。最近執筆の論文、「村上春樹『レキシントンの幽霊』論 ―作品の魅力と学習材としての魅力―」（二〇一五年）。「三つの小さな物語 ―学習材としての川上弘美『水かまきり』論―」（二〇一六年）。「主権者教育についての一考察 ―村上春樹『青が消える』(Losing Blue)を教室で読む―」（二〇一七年）。「学習者と作る楽しい古典の教室―『伊勢物語』のスキット授業―」（二〇一八年）。